

編 集 後 記

今年のワールド・ベースボール・クラシック (WBC) では、野球の本場のアメリカで日本が連覇するという偉業がありました。野球の本場、アメリカでの日本人選手の活躍は、1995年の野茂の新人王授賞から、2004年にはイチローが262安打で84年ぶりにメジャーのシーズン安打記録を塗り替え、さらに今年は、先日シアトルでのエンゼルス戦で張本勲氏の日本プロ野球通算最多安打記録のタイ記録である日米通算3085安打を満塁弾で決めるという活躍をしています。また、ヤンキースの松井、レッドソックスの松坂などを始め、その他にも多くの日本人選手達が活躍しています。このような日本人選手の活躍の発端は、やはり野茂が1994年に日本人2人目の大リーガーとなったことでしょう。その頃、ちょうど留学中であったために、車を300km以上走らせて野茂の試合を見にいったこともありましたが、あれから十数年の間に日本人選手の大リーグへの進出が一気に加速されました。

一方、医学の領域ではどうでしょう。最近、外科手術後の補助化学療法について調べる機会を得ました。“補助化学療法”，すなわち“adjuvant chemotherapy”という言葉が最初に登場するのは、1950年代のことです。この頃、既にアメリカでは全国的な術後補助化学療法の臨床試験を開始しようとする動きが始まりました。そして各臓器の臨床試験が開始されるわけですが、これに関する記載が1950年代の The Journal of the American Medical Association (JAMA) 誌に掲載されています。この論文は術後補助化学療法の臨床試験に関する最初の重要な論文となっています。ところが、驚いたことに、この論文の中で引用されている17論文のうち、2編が日本の論文、しかも“日本語”の論文でした。このことは、当時の日本の研究、そして論文が世界的に高く評価されていたことを示しているのだと思いました。1950年代、日本人はこの領域で“頑張っていた”，と感じた次第です。現在では、さまざまな状況も変わり、JAMA 誌の論文に“日本語”の論文が2編も引用されるということは考えにくいと思います。ただ、現在にも共通して言えることは、論文として情報を発信しておくことの重要性でしょう。今回も、本誌には原著論文、症例報告、臨床経験と、興味深い論文が掲載されております。今後も、重要な経験を情報として発信しておくために、積極的な投稿を期待しております。

(渡邊聡明)